TAKE FREE

KONU WORK

甲奴で働くが見つかる、地方の求人冊子

特集

地域をつくり支える左官職人
介護と農業で地域を盛り上げる

2018 SPRING

田舎の小さなまちで、求人冊子をつくりました。

三次市地域おこし協力隊　杉浦 快

都市部での慌ただしい日々に疲れ、ほんの少しの違和感を覚え始めている。地方での暮らしに興味があって、通勤中にスマホで調べてみたこともある。自分にもいつかそんな日が来るのかなと、心の中で呟きながら今日も頑張っている。そんなあなたに届いたらと思って、この求人冊子をつくりました。

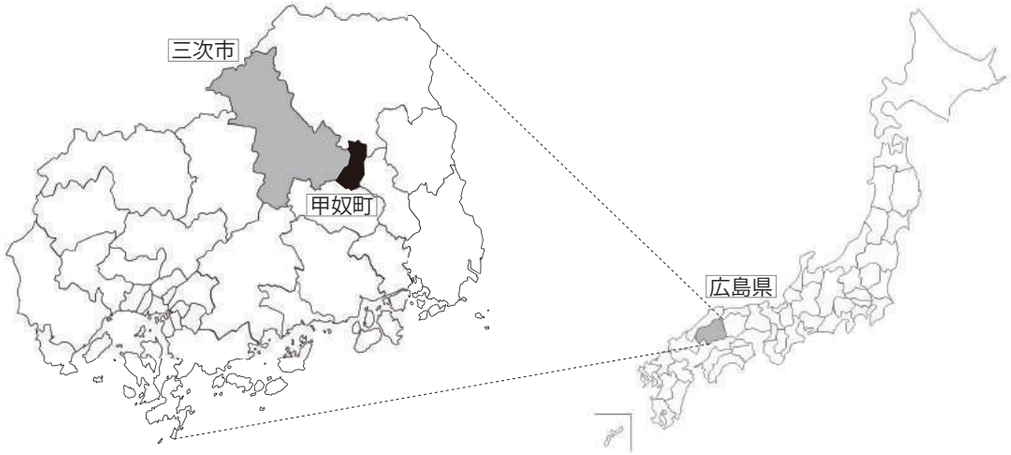
美しい自然、季節を感じる旬の食べもの、温かい近所付き合いや昔から続く伝統文化。あるいは、空き家バンクによる住まいの情報や、行政が発信する子育てに関する支援など。地方の魅力や移住者たちの豊かなストーリーを伝える雑誌やウェブメディアは山ほどあります。

それでも一歩を踏み出せないのは、「地方には仕事がないと思っているから」ではないでしょうか。

そんなことを「勝手に」想像してみると、不思議な矛盾に気が付きました。地方こそ人が少なく仕事の担い手を求めているからです。そこで地域の人たちに協力を依頼し、彼らの仕事内容や求人情報を聞きました。そこから見えてきたものは、都市部にあるような大きな仕事とはまた違った、地方ならではの面白さや魅力でした。

この甲奴(こうぬ)町はどこにでもあるような田舎の小さなまちです。連日観光客で賑わう名所や日本一〇〇な名産もありません。約 2,500 人の日々の営みが、穏やかにつづいています。
生まれも育ちも生粋の甲奴人が教えてくれました。「甲奴には、何もないんよ。見どころも名産品もないけど、変なしがらみや大きな震災も何もない。この何もないのが、暮らしやすくてええんじゃろうね。」

この冊子を読んで興味を持ってもらえたら、ぜひ三次市甲奴支所までご連絡ください。心よりお待ちしています。■



広島県三次(みよし)市甲奴(こうぬ)町は、広島県の東北部、三次市の南部にある人口 2,500 人ほどの小さなまちです。中国山地と四国山地に挟まれて地震や台風が少ない地域で、東西に走る中国自動車道と南北に走る中国横断自動車道尾道松江線が交差する交通の要所でもあります。1990 年に第 39 代アメリカ合衆国大統領ジミー・カーター氏が訪れたことをきっかけに、氏にゆかりのあるジョージア州アメリカス市との国際交流が始まり、中高生の相互訪問は 25 年以上つづく伝統となっています。

INTERVIEWS

TABLE OF CONTENTS

地域をつくり支える左官職人 / page 4 - 9

介護と農業で地域を盛り上げる / page 10 - 15

INFORMATION

瀬尾組
創業 1953 年
-
募集人数フルタイム 2 人

株式会社チアフル〈介護福祉業〉
創業 2012 年　従業員数 15 人
広島県三次市甲奴町本郷 2555
募集人数フルタイム 1 人、パートタイム 2 人

株式会社グリーンカウベル〈農業〉
創業 1978 年　従業員数 38 人
広島県三次市甲奴町福田 827
募集人数フルタイム・パートタイムともに 2, 3 人

INTERVIEW-1

地域をつくり支える左官職人

MITSUHIRO SEO
瀬尾満弘、1962 年広島県三次市生まれ、左官職人

田舎暮らしの醍醐味の一つは、石窯やオンドルなど身近な自然素材を活用した暮らしの道具づくりだろう。それら全ての基礎となる左官の技術は、世界的に関心の高い日本の伝統技術だ。その一方で現場の職人たちは減っていき、その技と担い手も失われつつあるという。甲奴町で左官歴 23 年の瀬尾満弘さんも跡継ぎを探している。あと 10 年は続けられるから、その間にゆっくり技術を伝えられたらと語ってくれた。

町内の新築で土間づくり。丁寧に、なめらかに、仕上げていく。

「配合の基本はあるんじゃけど、泥の乾き具合は気温や湿度で変わるけぇ、
環境によって調整せんといけんのよ。
なんで経験と感覚の仕事なんよね。自分の目と肌でわからんといけん」

左官職人になるまで——

生まれは甲奴町の宇賀（うが）。高校までは柔道に明け暮れて、卒業後は自衛隊に入った。体育系の大学進学を経済的な理由で諦めたときにリクルーターが来て、体育系が希望ならぜひ来ないかと誘われたからだ。後方支援部隊として主に銃剣道をしていた。朝 8 時に朝礼をして 15 時まで銃剣道の訓練をし、17 時までは自主練習だった。「先輩らの話を聞いとって、北海道の配属になりたいなって思うとった。そしたらようけスキーができるけぇね。」

自衛隊に所属して 4 年経った頃、両親から地元に戻ってきてほしいと言われた。長男だったし、そういうものだと受け止めた。帰ってからは福祉施設での 5 年間も含めて、いろいろな仕事をしていた。ダムの建設が近くで始まり、立ち退く住民のための新築の仕事がたくさんあると左官職人の父から聞いた。母は「体一本で安定した仕事でもない。左官の道には進んでくれるな」と言っていた。19 歳から左官一筋でやってきた物静かな父は何も言わなかった。ちょうど仕事がない時期だったので、アルバイトで父の手伝いをすることになった。32 歳で入った左官の世界で、今も生きている。

左官の仕事について——

仕事は個人で請けていて、施主から直接頼まれることも大工仲間から頼まれることもある。昔は冬が閑散期だったが、今は季節関係なく発注がくる。基本は日曜休みだが、雨が降ったら休みなど実際には天気次第だ。特に冬と梅雨の時期は気温と湿度が毎日変わり、段取りを組むのに苦労するが、「自然相手、お天道様とともにある仕事じゃね」と笑って教えてくれた。三次市の建設労働組合に入っていて、基本的な作業単価である人工（にんく）や保険料も決まっている。組合の甲奴支部には 100 人ほどの職人がいたが今は 30 人まで減り、20 人いた左官職人も 5 人になった。仕事も減ったが、これ以上はもう減りようがなく、職人に対して仕事が多い状態が続いている。

左官の世界は道具があまり機械化していない。大工の世界ではノコギリが丸ノコに、釘と金槌がビスとインパクトに替わったが、左官では鋳鉄の他にステンレスのコテが出てきたくらいだ。ちなみにコテは 50 本ほど持っていて、よく使うのはそのうちの 4, 5 本ほどだそうだ。

都会では左官職人も専門性でわかれるが、田舎は人が少ないので何でもやる。タイル、ブロック、コンクリート、モルタル、白壁や直炊きのお風呂もある。毎回違うから飽きることもなく、幅広い技術を身につけることができる。

「配合の基本はあるんじゃけど、泥の乾きは気温や湿度で変わるけぇ、環境によって調整せんといけんのよ。なんで経験と感覚の仕事なんよね。自分の目と肌でわからんといけん。これじゃ！いう独自の論理はあるんじゃけど、今でも当たるときも当たらんときもあるけぇね（笑）。」

でも、だからこそ狙った通りにできたら面白い。何時間後にどうなるか、何ヶ月後にどうなるか。左官は先を先を見据える仕事だ。

昔の左官と今の左官——

今の家は安い。昔の家は数世代が暮らせるようにお金も時間もかけて丁寧につくられていた。木材は買わ

今回の現場には 3 本のコテを用意して、塗る場所によって使い分けていた。

「今は夜に家帰ってお酒をいっぱい飲み飲みしとっても明日の仕事を考えとる。
これが職人の楽しさじゃろうね。
まあ酔ったら何考えとったか忘れちゃうんじゃけど（笑）」

ず冬に大工が山から木を切り出して、「これは柱にして、こっちは梁につかおう」と選んでいた。工期は 2, 3 年で、柱を立てて泥壁をつくったらひとまず入居。泥が乾いた頃に左官職人が来て上塗りをしていた。施主は職人に頼んだら、あとはすべて任せる。家にとって良い方法をするのが当たり前で、職人たちはそのための技術と知識を持っていた。

「今の仕事がつまらんわけじゃないが、昔のやり方は職人としても面白かったよのぅ。」

職人側の変化も見られる。例えば「二度塗り」だ。一度塗って水が引けて、「今だ」というタイミングがわからない職人は街に多くなったという。二度塗りの定義そのものが違う。時期が適切であればきれいに塗れるが、とにかく二回塗れば二度塗りだという人もいる。同じ左官職人でも全く違う。向上心の違いでもあり、誰に学ぶかでも違うという。

しかし工期は厳しく管理され、塗る時期が違うとわかっていても塗らないといけないときがある。左官の結果だけを見ると良いことにはならず、職人としては悲しい。

「でも自分勝手な段取りをして、大工さんらに赤字を出させるわけにもいかん。その条件で一番ええ仕事をせんとね。」

募集する人材について——

「初めの 3 年は修行だと思ってほしい。それからは自分の思うようにやってもらえばええ。これでええという職人さんと、もっとやらにゃいけんという職人さんと。どんな世界でも同じだけど、そのあとの完成度は自分が決めることじゃろうね。」

日当は安くて仕事は楽ではない。基本を身につけるための勉強の期間について、そう語ってくれた。必要な資質は言われたことがちゃんとできること、それだけ。でも作業員としては来てほしくない。朝、現場にきて 17 時になったら帰りますというだけの人は続かないからだ。向上心を持って、どうやったらうまくできるかを日々考えられる人がいい。

左官は力仕事だ。コテを力強く押さえ、重い泥を運ぶ。はじめは腕がパンパンになって、箸も持てなくなるそうだ。だから年齢は 35 歳くらいまで。「ほんまは制限なんかないんじゃけども、肉体的な辛さが先にきてしまうじゃろうね。でも、やる気があれば 40 歳でも大丈夫よ」。もちろん、男女は問わない。女性の左官職人が最近増えていることについて、「ええことよね」と笑った。

たくさんは儲からないけど、仕事はいくらでもあって食べていくには困らない。「急ぎじゃない仕事は先延ばしにしてもらってるんよ。申し訳ないことじゃけど」。プライドをもっていい仕事をちゃんとしていけば、人として信用される。信用があればやっていける。

最後にふと聞いてみた。「職人」って何だと思いますか？

「向上心を持ってあがいとる人かの。雇われとるかは関係なくて心持ちの話じゃろうね。左官やってたって職人じゃない人もおるし、農業の職人さんだっておると思うよ。おれも左官やる前は、仕事中もずっと週末のスキーのことばっかり考えとった。でも今は夜に家帰ってお酒をいっぱい飲み飲みしとっても明日の仕事を考えとる。これが職人の楽しさじゃろうね。まあ酔ったら何考えとったか忘れちゃうんじゃけど（笑）。」■

INTERVIEW-2

介護と農業で地域を盛り上げる

HAYATO OKANO
岡野隼人（左）、1982 年広島県福山市生まれ、株式会社チアフル専務取締役

EIJI IBARAKI
茨木栄治（右）、1985 年広島県三次市生まれ、株式会社グリーンカウベル代表取締役

介護のチアフルと農業のグリーンカウベルは、いま勢いのある会社として地域内外から注目されている。岡野さんと茨木さんはいずれも経営課題は人材不足と答えるが、巷で耳にするような地方の後継者不足ではない。大きなビジネスチャンスを見据え、拡大する事業の担い手を求めている。他業種からの転職、UターンIターン組に家族経営の継承と、似通った経歴をもつ二人に、これからの自社の行く末や展望、そして求める人材や期待を聞いた。

「日本は 2040 年まで高齢者が増えていきます。
つまり介護は成長産業です。
ここまでシンプルに成長が見込める業界は他にありません」

岡野さんが介護の仕事に就いてから 3 年が経った。今でも利用者さんから教わることばかりだという。

お二人の経歴からお願いします。
――岡野：出身は広島県福山市で、生まれてすぐ東京に引っ越しました。15 歳で福山に帰って中高と過ごし、大阪の大学に進みました。仕事は福山で信用金庫を 6 年半、山口県で住宅営業を 4 年半経験しそこでは支店長までさせてもらいました。その頃に母親がこのチアフルを始めたのですが、介護は経験もないし手伝えないよと言っていました。しかし子どもが生まれたとき、どこに身をおきたいかと考えると福山しかありませんでした。それで 2015 年から福山に戻りチアフルで働いています。祖父母の家があって夏休みはいつも甲奴に来ていました。小学校のプールにも行きましたね。甲奴はいろいろな思い出のある場所です。

茨木：私は甲奴で生まれ育ちました。地元の高校を卒業してから大阪外語専門学校で 1 年学び、オーストラリアで 1 年ホームステイをしました。それからはアメリカの大学で獣医学を学ぶつもりでしたが早く仕事がしたいと思うようになり、日本に戻ってから広島の旅行会社に入り添乗員を 2 年と内勤を 3 年しました。いつかは家業を継ぎたいと考えていたので、仕事が一区切りした 2012 年に甲奴に帰ってきました。

岡野：私は I ターンなので地域に知り合いがいて羨ましいです。甲奴に来てすぐのとき、誰に何を頼っていいのかわからなくて苦労しました。

茨木：地域の繋がりはありがたいですね。でも、自分が小さいときにした悪さを覚えている方々もいて、恥ずかしいことも多々ありますよ。それに私は甲奴を一度出ているので、少し外からの目線で地域を見ていると思います。

会社の概要と職場の雰囲気を教えてください。――茨木：ハウス 33 棟でほうれん草 1.2ha、19 棟で夏秋イチゴとほうれん草、露地栽培でピーナッツとキャベツを 4ha、乳牛を 30 頭、水稲を 2ha やっています。社員役員が 7 人、パートタイムが 24 人、ベトナムからの研修生が 7 人です。雰囲気はいいですよ。アットホームで家族のような職場にすることを心がけてきました。私は外出して不在にすることも多いのですが、それを当たり前として全員が自律的に動いています。若い人もベテランも関係なく、ざっくばらんに言いたいことを言い合う職場です。

岡野：古民家を改装した老人ホーム併設型のデイサービスを行っています。利用者さんの定員は 20 人と少ないので、一人一人にしっかり向き合えるサイズ感です。フルタイムが 7 人にパートタイムが 8 人で、雰囲気は抜群にいいですね。一般的には「機能維持のために、本人の希望がなくてもこういうサポートをすべき」など大小さまざまなマニュアルがありますが、良くも悪くも介護とはこうあるべきという方針がありません。それぞれが目の前の利用者さんと向き合い、その人が望むサポートをしています。結果的に利用者さんと社員の関係が良くなり、会社全体の雰囲気も良くなるという好循環ができています。ただ特殊な社風でもあるので、介護のマニュアルを重んじて仕事に取り組まれる方にとっては戸惑いも多いかもしれません。

その社風は狙ってつくったものですか？――岡野：たまたまですね！もともと看護師だった社長が、病院は忙しく働くだけで利用者さんに向き合えない、という想いから始めた事業でもあります。介護未経験の職員たちと始めたものが、紆余曲折を経て今の形に落ち着きました。

会社が目指す将来像を教えてください。――岡野：日本は 2040 年まで高齢者が増えていきます。つまり介護は成長産業です。ここまでシンプルに成長が見込める業界は他にありません。2018 年夏に二棟目を福山でオープンする予定で、2019 年には三棟目を建てたいと考えています。一棟の償却と返済が約 20 年な

ので、2020 年までにハードの大きな投資を終わらせ、それからはスケールメリットを活かしながらソフトの拡充を図りたいです。

茨木：教育に力を入れていきます。私も新規就農をしようとしたとき、経験からくる指導が中心でした。例えば時間外労働は当たり前だとか、育て方も感覚で教えてもらうことが多かったです。ここでは IT も活用して土壌分析や施肥設計を行い、科学的に実証可能な方法でこの場所で長く続けていける農業を目指しています。ただ、使われていない土地は地域にまだまだ残っていますね。

岡野：耕作放棄地や空き家が増えている現状を私はチャンスだと見ています。規模の拡大にあたって甲奴の拠点は重要で、例えば福山の中心部で農業はなかなかできませんが甲奴では可能です。いまも無農薬農業とヤギの飼育に専任の社員がいて、利用者さん向けの食べ物をつくっています。多くの施設はレトルト食品なので、これは差別化になります。収量も少しずつ上がってきましたが、プロには及ばず勉強の毎日ですね。

茨木：私たちこそ勉強の毎日ですよ。いまも県内の農家さんたちとネットワークをつくり、広島中の最先端の技術を学び合える環境を整えようとしています。三次市、庄原市、三原市の 3 市に拠点を持っていますが、ゆくゆくは各市町村に拠点をつくり広島県全域の新規就農者を受け入れるようになりたいです。農業は日照時間、水、気温などに大きく左右されます。自然という不確定要素が大きいなかで、無知のまま取り組んでしまうのは危険です。何の対策もできない場合もありますが、技術や工夫でカバーできることもたくさんあります。それらをきちんと身につけてから、同じ生産者として独立していってもらいたいです。

岡野：農業全体が盛り上がっていきますね。私は介護福祉を軸に、地域の課題を解決する総合事業者にしていきたいです。これから寿命 100 年の時代がくる中で、いま高齢者と言われる人たちも仕事をして何かに貢献したい人は必ずいます。そこで、自社に多種多様な仕事と雇用があれば受け皿になれます。地元の野菜をつかった地域の方向けの食堂やフィットネスサロンなど、いろいろな事業をつくっていきたいです。

最後に、募集する人材や期待を教えてください。——茨木：パートタイムでは週 1 時間から来ていただけます。ほうれん草の選定は難しくないので、すぐに覚えられます。いま多いのはお母さん世代ですね。家庭の副収入源として使っていただいています。フルタイムでは「農業をしてみたい」という人ではなく、「農業をするんだ」という人に来てほしいです。私たちがつくっているのは食べ物で、食べてくれる人のことを考えると中途半端な仕事はできませんから。技術や経験の有無は問いません。同じ境遇の人はたくさんいて、ちゃんと学べる環境をつくっています。自分が育てたもので、人に喜んでもらいたいという真摯な想いがある人を大歓迎します。

岡野：ここも雇用はフレキシブルで、パートタイムは 9 ～ 18 時の間で 3 時間から働けます。フルタイムは 24 時間の中で 8 時間勤務です。未経験でもいいので、介護に少しでも興味を持ってもらえたらぜひ来てください。介護で大切なのはコミュニケーション能力です。例えば、記憶が 5 秒しか続かない症状の方がいます。記憶はなくなりますが、その時々に受けた感情は残るんです。記憶が残らないからと向き合い方を疎かにすると、嫌な感情だけが積もり信頼を失ってしまうこともあります。レストランでもホテルでも企業相手でも接客がありますが、介護ほど生活全般に大きく向き合う仕事はありません。ある意味では、介護は究極の接客業ですよね。これからの時代に介護の技術と経験がある人材は貴重だと思います。■

隣町の新規就農者にハウスを建てるアドバイスをしていた茨木さん。もちろん現場で一緒に作業もする。

「技術や経験の有無は問いません。同じ境遇の人はたくさんいて、
ちゃんと学べる環境をつくっています。
自分が育てたもので、人に喜んでもらいたいという
真摯な想いがある人を大歓迎します」

甲奴で働くが見つかる、地方の求人冊子 KONU WORK

発行年月：2018 年 3 月　　発行：三次市甲奴支所／甲奴町振興協議会連合会　　編集：近藤亮一

〈三次市甲奴支所〉　広島県三次市甲奴町西野 40-1　0847-67-2121　kounu@city.miyoshi.hiroshima.jp

〈甲奴町振興協議会連合会〉 広島県三次市甲奴町本郷 10940　0847-67-3535　info@cartercenter.jp

甲奴町情報ホームページてくてくこうぬ　www.kounu.jp